インプラント治療をLongevityから考察

～インプラント補綴における咬合支持～

　1983年にオッセオインテグレーションタイプのインプラントが導入され、早や40年余りが経ち、ますますインプラント治療が脚光を浴びている。良い結果を得るために、フィクスチャーの表面性状・形態やインプラント外科、インプラント補綴等、インプラント治療に関する様々な研究がなされている。今日では、デジタルデンティストリーの目覚ましい進歩と共に、臨床的にも適正に検証されるようになってきていて、良好な治療結果が誌上や講演会等で数多く報告されている。

　一方、最近はトラブル症例も多く見られるのが現実である。このトラブルを検証してみると、インプラント外科に起因するものを除けば、メンテナンス時に起きてくるペリインプランタイティス等、炎症のコントロールに関する問題がある。

　またオーバーロードが原因となり、力のコントロールが上手く出来ない症例もあり、問題を解決するためには、インプラント治療の目的を見失わないようにすることが大切である。

欠損部の補綴法には、従来型のブリッジやデンチャーがあり、インプラント補綴も欠損歯列への対応法の一つである。欠損歯列に対し補綴治療をする目的は、機能の回復と審美性の改善で、最終的に重要なことは歯を含めた残存組織の保全であり、このことが “Longevity” に繋がると考えている。

　機能の回復、即ち咬合の回復を図るとき、咬頭嵌合位を安定させることが最も重要であり、Key Word になってくるのが、臼歯による咬合支持、特に大臼歯での咬合支持である。適正な咬合支持によって下顎位が安定し、さらには良好な姿勢（頭位）の安定が嚥下・呼吸にも良い影響をもたらす。

　インプラント治療におけるインプラント外科は、咬合・機能回復の準備ステージと捉え、インプラント補綴が適正に施されてはじめて、生理的機能・回復が可能となる。

今回は時間の関係で、インプラント補綴における咬合支持の重要性を通して、インプラント治療のLongevityについてまとめてみた。

本多歯科医院院長

本多　正明 　　　 　　　英語表記：Masaaki Honda

略歴

1970年　　大阪歯科大学卒業

1973年　　日本歯学センター在籍

1978年　　東大阪市にて本多歯科医院開設

2021年　　大阪歯科大学大学院口腔インプラント学講座卒業

大阪歯科大学 歯学部 口腔インプラント学講座 臨床教授

所属

日本臨床歯科学会　副理事長 及び 大阪支部最高顧問

日本顎咬合学会　終身指導医

日本口腔インプラント学会　会員

咬合・補綴治療計画セミナー　主宰

